

みなさん、こんにちは。校長の合浦英則です。今年度も様々な名言にちなんだエッセイをお届けします。これを通して何かしら感じてもらえたら嬉しいです。さて、今年度の第1回は…

何かを好きになる、夢中になる、そういう気持ちが自分の中にあることを、もっと幸せに思わなくちゃ

菅田哲也『武士道シックスティーン』

武蔵を心の師とする剣道エリートの香織は、中学最後の大会で、無名選手の早苗に負けてしまう。敗北の悔しさを片時も忘れられない香織と、勝利にこだわらず「お気楽不動心」の早苗。相反する二人が、同じ高校に進学し、剣道部で再会を果たすが…。青春を剣道にかける女子二人の傑作エンターテインメント。
(「BOOK」データベース「本の内容」から転載)

「好きなものってある？」と聞かれても食べ物しか思い浮かばない。僕はなんとも情けない気持ちになる。でも自分の人生を振り返ってみると、その時その時に夢中になっていたものがあった。

高校では新聞局に入った。自分の意見を印刷物に載せて発表できる。自分の文章が印刷されるのだ。嬉しかった。印刷所に入稿するときに字数調整を迫られるときがある。「あと 30 字短くせよ」の類いである。表現を変え、語彙を変え、字を削っていく。そうして要約力が身についた。入試現代文の記述問題がいつしか得意になっていた。ただし、その時はまさか自分が校長となって学校通信を自分で発行することになるろうとは思はずもなかった。

大学ではひょんなことからロシア語を選択した。そこで教わっていたロシア人の先生に誘われ早稲田大学のロシア語演劇サークルに入った。大隈講堂の舞台に立ち、ロシア大使館でも演劇を披露した。僕自身はロシア語が全く上達せず、その上、役者失格の烙印を押され演出担当という名の大道具係だったが、仲間と舞台を作り上げる面白さにはまった。たまたま同期の早稲田の学生が体調を崩してしまい、他大学なのに僕がサークルの幹事長（いわゆる部長）になってしまった。そんな一大事に、様々な大学から集まったメンバーたちが僕をしっかりとサポートしてくれた。僕のロシア語は最後までからっきしだったが、それから 25 年後、高校生ビザなし訪問団の引率教員として国後島を訪れ、「モスクワ郊外の夕べ」という曲をロシア語で歌い、大喝采を受けることになるろうとは思わなかった。

菅田哲也さんの『武士道シックスティーン』は剣道に熱中する高校生が主人公だ。勝負にこだわる香織とお気楽に楽しむ早苗。対照的な二人の成長物語である。

ある時、勝ちとか負けとか考えたくないという早苗に、彼女の父は勝つ方法は「好きだっていう気持ちを、自分の中に確かめる」ことだと言い、こう続ける。

好きなものにめぐり合えない人生の方が、もっと悲しいし、つらいよ。だから、お前は好きなものに出会えたことを、もっと喜ばなくちゃ。何かを好きになる、夢中になる、そういう気持ちが自分の中にあることを、もっと幸せに思わなくちゃ。

一方、剣道をやる意味がわからなくなった香織も早苗との勝負を通して「剣道が好き」という原点に帰ることが大切だと気付いていく。そして、そんな香織を見て早苗はこう思う。

うちのお父さんと、おなじことを言ってる。

結局、情熱とか、その人を突き動かすエネルギーみたいなものって、好きって気持ちからしか、出てこないものなのかもしれない。

今の高校生は何かと忙しい。でも、その時期にしかできないことってあるように思う。いつか大人になって高校時代を振り返った時、「なぜ、あんなことに夢中になっていたんだろう」と思ったとしても、それは多分後悔ではなく、夢中になれたことを羨ましく思う気持ちのような気がする。もちろん、羨ましいなんて思わずに、幾つになっても「今、これに夢中です」とにこやかに話せる自分でいたいものだけれどね。

